

# 『資本論』発刊150年

ちょうど150年前の1867年9月、カール・マルクスの『資本論』第1部が発刊されました。私と『資本論』の出会いは42年前。以来すっかりはまってしまい、いまも若い人たちの読書会を行っています。

何がそんなに魅力的なのか。一言でいうと学問的な「汎用(はんよう)性」(いろんなことに使える性質)の高さです。『資本論』は資本主義社会を本当に深く掘りかきながら掘えています。そのため、社会の表面に現れるさまざまな出来事を、長い歴史的な視野の中に、理論的に捉える力もっているのです。

『資本論』の世界と現代日本」というとき、よく取り上げられるのは富と貧困の対立(経済的な格差)や、労働条件の格別なひどさの類似です。しかし、その生命力は、労働関係の枠にとどまるものではありません。たとえば、「資本主義の下で地球環境問題が起こるのはなぜなのか」「もし『U』を100とす

## 現代的生命力持つ汎用性

る経済が金融に比重を移し、バブルに振りまわされるようになるのはなぜか」「家事労働は資本主義の経済にどう組み入れられているか」「多産多死から多産少死へなどの人口転換が起こるのはなぜなのか」など、『資本論』は幅広い社会問題に根本的な究明のメスをいれています。

大きすぎなくそれは、学問とよりよい社会をめざす運動にとっての宝の山となっています。

では、その根底にある『資本論』が資本主義社会を深く捉えている」というのはどういうことでしょうか。

一つ挙げるなら、それは資本主義社会を「長い人類社会の経過的な一段階」と捉えることを、はっきり前提しているところにあります。資本主義社会は、他のすべての社会と同じように、先行する社会の中から生まれ、次の社会に席を譲っていく。その意味での歴史的

な発展法則の究明を、『資本論』は研究の「最終目的」にしています。

ですから『資本論』は資本主義を「肯定的理解のうち」に「その否定」、その必然的没落の理解を含め(む)「という弁証法的な方法で捉えます。

資本主義らしく利潤第一主義で労働の搾取を深めていくこと(肯定)が、同時に未来社会への物理・主体的な準備をもたらしていく(否定)——そこには労働者階級の発達が重要な要因として含まれる——ことが、骨太く盛りだされています。それは高揚する現代の「市民運動」(多くが労働者とその家族による)を捉える基礎的視角を与えるものにもなるでしょう。

現代日本で量的に支配的な経済学は、「大資本の自由にまかせよ」とする「新自由主義の経済学」です。それは資本主義の構造や歴史を究明する科学の精神を失い、資本主義とは何かという根本問題に心えられないものになっていきます。そんな「経済学」に、日本の未来を託せるわけがありません。『資本論』は今なお、科学としての経済学にとって最良の質をもつ先行研究となっています。

石川康宏(いしかわ・)

